（岩倉紙芝居館古典館<http://hjueda.on.coocan.jp/koten/koten.htm>）　宰主　上田啓之

『荀子』議兵篇に、臨武君の言として「孫（子）・呉（子）も之（勢利、変詐、感忽、悠闇）を用いて、天下に敵無し」とあり、『韓非子』五蠧篇には、「孫・呉の書を蔵する者は、家ごとに之れ有り」、さりとて兵は弱いと嘆いており、戦国時代に広く普及していたとされる。司馬遷は「孫子・呉起列伝」を著し、呉王の闔閭（こうりょ、在位BC514-496）に仕えた斉人の孫武、その百年後の子孫、斉の田忌に仕えた孫臏の事績（桂陵の戦BC353、馬陵の戦BC341）、孔子の高弟の曾子の弟子であり、後に魏の文候（在位BC445-396）、武候（在位BC395-370）に仕えた衛人の呉岐の事績を記した。『漢書』芸文志・兵権謀家類には、『呉孫子兵法』82巻・図9巻、『漢書』30巻・志第10に「斉の孫子89編、図4巻」とあり、 顔師古がこれに「孫殯」と注 している。現テキストは13編であり、魏の曹操（武王）が編纂注した『魏武注孫子』による。
1972年、山東省銀雀山の前漢時代の墳墓から『竹簡孫子』や『孫殯兵法』の竹簡が出土し、『呉孫子兵法82巻・図9巻』と『斉の孫子（孫殯）89編、図4巻』は別物で、孫殯の兵法書は伝わっておらず、『呉孫子兵法』が継承されていることが判明したそうである。孫武の記したものが、後継者により82巻・図9巻に膨れあがり、曹操が基本となる部分に簡略化したとされる。続日本記、天平宝字四年（760年）十一月丙申条に、「舍人の春日部三関に刀を授け、中衛舍人土師宿禰関成等六人を大宰府に遣はし、大弐吉備朝臣真備に就かせ、諸葛亮八陳と孫子九地及び結営向背を習はしむ」とあり、「孫子」はこの時代から我が国でも読まれていた。

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、孫子曰く、昔の善（よ）く戦う者はまず勝つべからざるをなして、もって敵（てき）の勝つべきを待つ。勝つべからざるはおのれにあるも、勝つべきは敵てきにあり。ゆえに善（よ）く戦う者は、よく勝つべからざるをなすも、敵（てき）をして勝つべからしむることあたわず。ゆえに曰く、勝（しょう）は知るべくして、なすべからず、と。勝つべからざる者は守（まも）るなり。勝つべき者は攻（せ）むるなり。守るはすなわち足らざればなり、攻むるはすなわち余（あまり）あればなり。善（よ）く守る者は九地（きゅうち）の下に蔵（かく）れ、善（よ）く攻むる者は九天（きゅうてん）の上に動く。ゆえによくみずから保ちて勝（しょう）を全（まっとう）するなり。
■不可勝と可勝、主語と目的語が省略されており、分かりにくい。不可勝者守とあり、守備により敵に勝たせないことを想定している。可勝者攻となっており、敵を攻撃して勝つことを想定している。不可勝は自分が敵に勝たせない、可勝は自分が敵に勝つことになる。■守とは藏於九地之下とある。藏とは「説文」に「匿なり」とあり、注に、「善なり、凡ての物、善きは必ず内に隱るなり」とする。九は一～九の九で極まることを云う。九地は地の最深、九天は天の最上。地の最深に己の善を匿す。敵に己を全く悟らせぬ。攻めれば何が待ち受けているか、迂闊に攻め込めない不気味さがあり、自保する（自からを保つ）ことができる。■待敵之可勝。待とは「説文」に「竢（ま）つなり」とあり、立ち止まること。竢が廃され待が用いられた。己は藏れ、敵を待つとは、敵が動けばその形が明らかになる、形が明らかになれば、隙や弱点もみえてくる。攻めるとなれば、動於九天之上。はるか天の彼方から敵陣を見下ろすが如く、丸裸に敵情を察し、その弱点を縦横無尽に突く。力が均衡しておれば、先に動いた方が不利としていよう。■全勝。全とは「説文」に仝に作り「完きなり、入に従い工に従う」あるいは「玉に従い、純玉を全という」とある。勝を完全なものとする。されど、全勝とは戦いて完璧に勝つことではなく、戦わずして勝つこととなろう。

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、　勝（しょう）を見ること衆人（しゅうじん）の知るところに過（すぎ）ざるは、善の善なる者にあらざるなり。戦い勝ちて天下善（よ）しと曰うは、善の善なる者にあらざるなり。ゆえに秋亳（しゅうごう）を挙（あ）ぐるは多力（たりき）となさず。日月（じつげつ）を見るは明目（めいもく）となさず。雷霆（らいてい）を聞くは聡耳（そうじ）となさず。古（いにしえ）のいわゆる善く戦う者は、勝ち易（やす）きに勝つ者なり。ゆえに善く戦う者の勝つや、智名（ちめい）なく、勇功（ゆうこう）なし。ゆえにその戦い勝ちて**忒（**たが）わず。**忒（**たが）わざる者は、その措（お）くところ必ず勝つ。すでに敗（やぶ）るる者に勝てばなり。ゆえに善く戦う者は不敗（ふはい）の地に立ち、しかして敵の敗（はい）を失わざるなり。このゆえに勝兵（しょうへい）はまず勝ちてしかるのちに戦いを求め、敗兵（はいへい）はまず戦いてしかるのちに勝ちを求む。
■見勝、とは勝が見（xiàn、あら）われる、明らかになることでもある。戦いて勝つ、これは誰にでも分かる勝。善の善は、戦わずして勝つこと。分かる人には分かるが、普通の人には、戦ったことすら分からないので、勝ったことも分からない。多力も明目も聡耳も密かに巡らされ、現れず、智者という名声も勇者という功績もない。■勝於易、易とは戦勝不**忒、戦勝**不**忒とは**措必勝、措必勝とは勝已敗者。既に敗者となっている者に勝つとは、必勝する立場に居り、戦って勝つことに何の疑いもない。つまり、易とは敗者と分かっている者と戦う状況であり、容易に勝つ。

、、、　善（よ）く兵を用（もち）うる者は、道を修（おさ）めて法を保（たも）つ。ゆえによく勝敗の政（せい）をなす。
■道、法、政の解釈は分かれる。計篇、一曰道（道者令民與上同意也）、五曰法（法者曲制官道主用也）、の道、法とする者。道を不可勝の道、勝道、仁義の道・・・法を法制、法度、賞罰、以下の兵法・・・とする者。政はここで始めて用いられる。論の展開からすれば、兵つまり民を勝兵、勝民とする道、法があり、修道、保法は勝政をもたらし、怠れば敗兵、敗民、敗政となる。

、、、、、、、、、、、、、　兵法（へいほう）は、一に曰く、度（たく）。二に曰く、量（りょう）。三に曰く、数（すう）。四に曰く、称（しょう）。五に曰く、勝（しょう）。地（ち）は度（ど）を生（しょう）じ、度は量を生じ、量は数を生じ、数は称を生じ、称は勝を生ず。ゆえに勝兵（しょうへい）は鎰（いつ）をもって銖（しゅ）を称（はか）るがごとく、敗兵（はいへい）は銖（しゅ）をもって鎰（いつ）を称（はか）るがごとし。
■度は席の省文と又(手)に従い、儀礼のときの筵席を設けるに当って、席をもってその長短を度ることから来ている（字統）。周制の長さは、指の幅が寸、両手で十寸、これを尺。婦人の手は小さく両手で八寸、これを咫。両手を広げて尋、八尺に当り、仞ともする。度には距離感がある。■量は流し口の付いた槖（ふくろ）の形、容積、重さ。黍（きび、粒の大きさ目片が一定）2400粒が一合（容積）、100粒が一銖（重さ）、24銖が一両、20両が一鎰。量には多少、軽重、広狭感がある。■数は數、婁（女子の髪を高く結い上げて髻の形）と攴（殴打すること）から成る。責めること、髪が乱れて数えがたいこと、計すること、数には一定の法則性があり必然、暦数、運命、世運の動き（字統）の義となる。■称は稱、（稱はchēngで軽重を量る、叫ぶ、名づく、説く、賛揚す、挙「挙兵」、chènで適合する、chèngで秤と同じ）。稱は禾と爯から成り、爯は爫と冉から成り、冉ははかりの重り、爫は手で持ち上げる形、禾の重さをはかること。秒とは禾の少、穂先のこと、「説文」に、十二秒（穂先）を一分、十二分を一寸（長さ）。十二粟を一分、十二分を一銖（重さ）とする。称は「はかる」、「くらべる」ことになる。■勝はshèngでは「かつ」、shēngでは「たえる」）となる。この字は朕と力から成り、「説文」は「任（たえる）なり、任は𠈃（保）なり」で段注に、「凡そ能くこれを舉げ、能くこれに克つを皆て勝と曰ふ。本、二義二音無し」とあり、任を「たえる」「たもつ」義にみている。朕と力の意味がすでに不明になっていた。朕は盤中にものを容れて、これを捧げて賸（おく、朕と貝）る意の字、力は耒（すき）の象形。盤中に耒を容れて捧げる形、農事の吉凶を占った。敗は貝を殴つ形、貝占いの方法。卜占からすれば、神意にかなうものが勝、勝は神意にかなうものと推測されている。勝とはその重さに耐えて保つ、あるいは、神意にかなうものという古来の義が背後にあろう（字統）。■生とは漢典に「一切は発育する物体に一定の条件下に具わり在り、すでに最初の体積と重量があり、并せて能く発展長大す」とある。「説文」には「進なり。草木土の上に出ずなり」とする。■地を度る、とは広さを計測すること。広さからそこの容量、そこに収容できる兵員･物資を算出し、彼我の数を秤にかける。鎰は銖より重い。天秤に両者を置けば、鎰は地に留まり、銖はたえきれず地を離れる。勝はたえて己を保つこと。

、、、　勝者（しょうしゃ）の民を戦わしむるや、積水（せきすい）を千仞（せんじん）の谿（たに）に決するがごときは、形（けい）なり。
■一仞は両手を広げた長さ、1.6ｍとすれば千仞は1600ｍ。積水とは、「積水連天何処通」「積水不可極、安知滄海東」とあるごとく、海を連想する水量。圧倒的な量で高所から落下するものに耐えて己を保つことは不可。戦わずして勝つが最善、戦うとなれば、戦う前に圧倒的優位に立てとならう。

**宋刊十一家註孫子**（[HP](http://www.cos.url.tw/sunzi/10man.htm)）（注釈者のプロフィールについては、古典ぱん（[HP](https://k10p.net/?p=1253)）に詳しい）

〈形〉篇

曹操曰く、軍の形なり。我が動き彼が應ず。兩敵の相察すは情なり。
李筌曰く、形と謂うは、主と客、攻と守、八陳、五營、陰と陽、向と背の形。
杜牧曰く、形に因りて情を見る。形無きは情は密、形有るは情は疏。密なれば則ち勝ち、疏なれば則ち敗れる。
王晳曰く、形は、定形なり。謂うは、兩敵の強弱は定形に有り。善く兵を用う者は、能く其の形を變化し、敵に因りて以て勝を制す。
張預曰く、兩軍の攻守の形なり。中に隱せば、則ち人得て知る可からず。外に見（あら）われば、則ち敵隙に乘じて至る。形は攻守に因りて顯（あら）わる。故に〈謀攻〉に次ぐ。

（孫子曰：昔之善戰者，先為不可勝，）
張預曰く、所謂「己を知る」者なり。

（以待敵之可勝，）
梅堯臣曰く、形を藏（かく）し內に治め、其の虛懈（空虛懈怠）を伺う。
張預曰く、所謂「彼を知る」者なり。

（不可勝在己，可勝在敵。）
曹操曰く、守るに固く備うなり。自らは修理（整治）し、以て敵の虛懈を待つ。
李筌曰く、夫れ善く兵を用う者は、守れば則ち壁を深くし、多く軍食を具え、善く其れ教練す。其の城を攻めるに、則ち橦棚（戦車）、雲梯、土山、地道を尚（たの）みとす。陳すれば則ち左に山川、右に丘陵、背孤向虛（奇門遁甲の六甲孤虚で「一汝が数萬人に敵す」の義）、疑に從（よ）り間を擊つ。善く戰うとは（椅して？）犄角勢（共同して對方を夾擊す）に連り、首尾相應ずは、不可勝（敵が勝つことが出来ない）を為す。夫れ善く戰うとは、能く不可勝を為し、敵の必可勝を能くせしめず。故に曰く、「勝は知る可くして為す可からず。不可勝は守なり、可勝は攻なり」。此の數（術数）は、以て可勝を為す。
杜牧曰く、自ら軍事を整え、長く有（たも）ち敵の備を待つ。跡を閉（とざ）し形を藏し、敵人をして能く測度せしめず、敵人に乘ず可き便有るを伺うに因りて、然る後に出でて攻める。
杜佑曰く、先ず之を廟堂に咨り、其の危難を慮り、然る後に壘を高くし溝を深くし、兵士をして練習せしめ、此を以て守備これを固め、敵の闕を待てば、則ちこれに勝つ可し。守備これを固むは、敵を制し外に在るを言う。守備これを固め自ら修理し、以て敵の虛懈を俟つ。已に敵に闕漏の形有るを見れば、然る後に勝つ可し。
王晳曰く、不可勝とは、道を修め法を保つなり。可勝とは、隙有る所のみ。
張預曰く、守る故は己に在り、攻る故は彼に在り。

（故善戰者，能為不可勝，）
杜牧曰く、不可勝とは、上文の註解に所謂、軍事を修整し、形を閉ざし跡を藏す是なり。此の事は己に在り。故に「能く為す（為す事が出来る）」と曰く。
張預曰く、形を藏し跡を晦（くらま）す。常に居りて備を嚴(重)にせば、則ち己能くす。

（不能使敵之可勝。）
杜牧曰く、敵が形に窺う可き無く、虛懈に乘ず可き無きが若きは、則ち我が可勝の具を操ると雖も、亦安んぞ能く勝を敵に取らんか？
賈林曰く、敵に智謀有りて、深く己が備を為すは、強いて己が備を不（なさ）ざらしむこと能わず。
杜佑曰く、敵が兵事に曉練し、策と道が合い、深く己が備を為すが若きは、亦強いて勝つ可からず。
梅堯臣曰く、己に在るが故に能く為す。敵に在るが故に必無し。
王晳曰く、敵に在りて我に在らず。
張預曰く、敵の強弱の形、外に顯（あきらか）ならずが若きは、則ち我豈に能く必ず彼に勝つや？

（故曰，勝可知，）
曹操曰く、形に見（あらわ）れ成ればなり。
杜牧曰く、知とは、但に能く己が力を知れば、以て敵に勝つ可し。
陳皥曰く、形に於て勝を取れば、勝を知る可し。

（而不可為。）
曹操曰く、敵に備有るが故なり。
杜牧曰く、言うは、我が敵人をして虛懈せしめ、我が為の可勝の資とすること能わず。
賈林曰く、敵が隱れて形無きが若きは、強いて勝敗を為す可からず。
杜佑曰く、敵に備有るなり。已が敵を料り、敵の形見われれば、則ち勝負は知る可し。若し敵が密にして形無くば、亦強いて敗れならしむ可からず（無理に破ろうとするな）。故に范蠡曰く、「時至らずば、強いて生く可からず。事究まらずば、強いて成す可からず」。
梅堯臣曰く、敵に闕有らば則ち知る可し、敵に闕無くば則ち為す可らず。
何氏曰く、可知の勝は我に在り、我に備有るなり。不可為の勝は敵に在り、敵に形無きなり。
張預曰く、己に備有れば則ち勝を知る可し、敵に備有れば則ち為す可からず。

（不可勝者，守也，）
曹操曰く、形を藏すなり。
杜牧曰く、言うは、敵人に可勝の形有ること未だ見われずば、己は則ち形を藏し、不可勝の備を為し、以て自らを守る。
杜佑曰く、形を藏すなり。未だ其の形見われざるが若きは、彼は眾（おお）く我は寡（すくな）し。則ち自ら守るなり。
梅堯臣曰く、且（また）待つこと有り。
何氏曰く、未だ敵人の形勢や虛實が見われず、可勝の理有れば、則ち固く守るべし。
張預曰く、己を知り未だ以て勝つ可からずんば、則ち其の氣を守りて待つ。

（可勝者，攻也。）
曹操曰く、敵が己を攻むは、乃ち可勝。
李筌曰く、夫れ善く兵を用うとは、守るに則ち壘を高くし壁を堅むなり。攻るに則ち橦棚（戦車）、雲梯、土山、地道（を用いる）。陳（陣）するに、左に川澤、右に丘陵、背孤向虛、疑に從り間を擊ち、五令を識辨（識別弁認）し以て眾を節し、犄角勢に連り、首尾相應ず者は、不可勝を為す。此の數（術数）無きは、以て可勝を為す。（上文に、此數者、以為可勝とある。此無數者、以為可勝と合致しない）
杜牧曰く、敵人に可勝の形有れば、則ち當に出でて攻むべし。
杜佑曰く、敵が己を攻めるは、乃ち可勝なり。已に其の形見われ、彼寡く我眾ければ、則ち攻むべし。
梅堯臣曰く、其の闕見われるなり。
王晳曰く、守とは以て勝に足らず。攻むとは以て勝に餘有り。
張預曰く、彼を知り可勝の理有れば、則ち其の心攻めて取る。

（守則不足，攻則有餘。）
曹操曰く、吾が守る所以は、力が足らざるなり。攻む所以は、力に餘有るなり。
李筌曰く、力が足らざるは以て守る可し、力に餘有れば以て攻む可し。
梅堯臣曰く、守るとは則ち力の足らざるを知る。攻むとは則ち力に餘有るを知る。
張預曰く、吾が守る所以は、勝を取る道に足らざる所有り、故に且（また）待つを謂う。吾が攻む所以は、敵に勝つ事に已に其の餘有り、故に出でて擊つを謂う。言うは、百勝に非ずば戰わず、萬全に非ずば鬬（たたか）わず。後人が「不足」を「弱」と為し、「有餘」を「強」と為すと謂うは、非なり。

（善守者，藏於九地之下；善攻者，動於九天之上；故能自保而全勝也。）
曹操曰く、山川丘陵の固に因るとは、九地の下に藏れること。天時の變に因るとは、九天の上に動くこと。
李筌曰く、『天一遁甲經』に云く、「九天の上、以て兵を陳す可し。九地の下、以て伏して藏る可し」。常に直符を以て時干を加え、後一所の宮に臨むを九天と為す。後二所の宮に臨むを九地と為す。地は靜にして藏るに利（よろ）し。天は運にして動くに利し。故に魏武（曹操）は二遁に不明であり、九地を以て山川と為し、九天を天時と為す。夫れ天一（奇門遁甲）、太一（金鏡式）の遁の幽微を以て、これを知りて用いるが故に全きなり。『經』に云く、「三（三吉門；開、休、生）を知り五（五凶門；傷、杜、景、死、驚）を避くは、魁然（安然）として獨り處す。能く三五を知れば、天下に橫行す」。此の法を以て出でば、諸（もろもろ）の咎（とが）に拘（とら）われずとは則ち其の義なり。
杜牧曰く、守とは、聲を韜（包み隠）し跡を滅し、幽なること鬼神に比（なら）びて、地下に在り、得て見る可からず。攻とは、勢は迅（すばや）く聲は烈（はげ）しく、疾（はや）きこと雷電の若（ごと）く、天上から來るが如くして、得て備う可からず。九とは、高く深く、數の極である。
陳皥曰く、春三月には、寅、功曹（こうそう）が九天之上を為し、申、傳送（でんそう）が九地之下と為る。夏三月には、午、勝先（しょうこう）が九天之上を為し、子、神後（しんごう）が九地之下と為る。秋三月には、申、傳送が九天之上を為し、寅、功曹が九地之下と為る。冬三月には、子、神後が九天之上を為し、午、勝先が九地之下と為る。
杜佑曰く、善く守備すとは、其の山川の阻、丘陵の固に因りて務め（力を尽くす）、攻む所を知らしめぬこと。其の深密なること、九地之下に藏るを言う。善く攻むとは、務天時、地利に因り、水火之變を為し、敵に備える所を知らしめぬこと。其の雷震、發動して九天之上に動くが若きを言う。
梅堯臣曰く、九地とは深きこと知る可らずを言う。九天とは高きこと測る可らずを言う。蓋し守り備うこと密にして攻め取ること迅きなり。
王晳曰く、守とは、未だ攻む可き利見われず、當に其の形を潛（ひそ）め藏し、沉靜（沈静）幽默して、敵人をして窺い測りせしめぬなり。攻とは、攻む可き利見われ、當に高遠にして神速、其の不意に乘じて、敵人が我を覺り懼れてこれが為に備うなり。九とは、極これを言うのみ。
何氏曰く、九地、九天とは、其の深微を言う。尉繚子の曰く、「兵を治むは、地に祕（ひそ）むが若（ごと）く、天に邃（すい；深遠なこと）すが若し」。其の祕密で邃遠なこと甚しきを言う。後漢、凉州賊の王國が陳倉を圍む。左將軍の皇甫嵩が前軍の董卓を督しこれを救う。卓は速進して陳倉に赴かむと欲（す）も、嵩は聽（ゆる）さず。卓が曰く、「智者は後時をせず、勇者は留決せず（即時に即決する）。速やかに救えば則ち城は全き、救わずんば則ち城は滅す。全か滅の勢、此に在り」。嵩が曰く、「然らず。百戰して百勝とは、戰わずして人を屈す兵に如くはなし。是以て先ず不可勝を為し、以て敵の可勝を待つ。不可勝は我に在り。可勝は彼に在り。彼の守が不足せば、我が攻に餘有り。餘有るは九天之上に動きて、足らざるは九地之下に陷る。今、陳倉は小と雖も、城の守は固く備わり、九地之陷に非ず。王國は強しと雖も、而して我が救わざる所を攻めるとしても、九天の勢に非ず。夫れ勢が九天に非ずんば、攻むは害を受く。陷が九地に非ずんば、守を拔けず。國は今已に陷、害を受く地、而るに陳倉は不拔之城を保つ。我は兵を煩わし眾を動かす可からず、而して全勝の功を取らむ。將に何すれぞ救わん！」遂に聽さず。王國は陳倉を圍み、冬より春まで八十餘日。城堅く守固く、竟（つい）に拔くこと能わず。賊眾は疲弊し、果して自ら解きて去る。
張預曰く、九地之下に藏るは、幽にして知る可からざるに喻う。九天之上に動くは、來りて備う可からざるに喻う。尉繚子の曰く「地に祕むが若く、天に邃すが若し」是なり。守れば則ち固し、是自ら保つなり。攻めば則ち取る、是勝を全すなり。

（見勝不過眾人之所知，非善之善者也；）
曹操曰く、當に未だ萌（きざ）さざるを見るべし。
李筌曰く、眾知に出でざるを知るは、善に非ず。韓信が趙を破るや、未だ餐せずして井陘に出でて曰く、「趙を破りて會食す」。時に諸將は嘸然として佯（いつわ）り應じて曰く、「諾」。乃ち背水の陳。趙は壁に乘りて望見し、皆大いに笑い、漢將は兵に便（習熟）せずと言う。乃ち趙を破りて、食し、成安君を斬る。此則ち眾が知らざる所なり。
杜牧曰く、眾人が見る所は、軍を破り將を殺し、然る後に勝を知る。我が見る所は、廟堂の上、罇俎（そんそ、宴席）の間、已に勝負を知る。
賈林曰く、守れば必ず固く、攻むれば必ず克つ。能く自を保全し、常に勝を失わず、未然の勝を見、善く將然の敗を知る（未然「未だ然らず」vs將然「将に然り」）。實（まこと）に微妙で玄に通ずことを謂う。眾人の見る所に非ず。
孟氏曰く、當に未だ萌さざるを見る。言うは、兩軍已に交（戦）し、雖勝負を料見すと雖も、策は人に過絕（超越）すること能わず、但に近形を見て遠に非ず。太公曰く、「智を眾と同じくせば、國師に非ず」。
梅堯臣曰く、人が見る所にして見るは、故に善に非ず。
王晳曰く、眾常の人とは、見る所勝を以てし、勝を制す形を知らず。
張預曰：眾人所知，已成已著也；我之所見，未形未萌也。

（戰勝而天下曰善，非善之善者也；）
曹操曰く、鋒を爭うなり。
李筌曰く、鋒を爭う力戰は、天下見易くして、故に、善に非ず。
杜牧曰く、天下とは、猶上文に言う眾のごとし。天下の人皆戰勝者を稱すを言う。故に、軍を破り將を殺すものなり。我が善とは、陰謀を潛かに運（めぐ）らせ、攻むとは必ず謀を伐ち、敵に勝つを日う、曾（すなわ）ち刃に血ぬらず。
陳皥曰く、潛に其の智を運らせ、專ら其の謀を伐ち、未だ戰わずして人の兵を屈す。乃ち是善の善なるものなり。
梅堯臣曰く、見ること眾に過ぎず、戰いて勝ち天下これを稱すと雖も、猶善と曰わずがごとし。
王晳曰く、謀を以て人を屈す、則ち善かな。
張預曰く、戰いて後に能く勝つ。眾人これを稱して善と曰う。是、智名、勇功有り。故に、「善に非ず」と云う。若微を見隱を察し、無形に勝を取れば、則ち真に善なるものなり。

（故舉秋毫不為多力，見日月不為明目，聞雷霆不為聰耳。）
曹操曰く、易く見て聞く。
李筌曰く、易く見て聞く。以て攻を為して戰いて勝つ。而るに天下、善と曰わず。夫れ智能の將、人測る所莫きを、深く謀る。故に孫武曰く、「知り難きこと陰の如し」。
王晳曰く、眾人の知る所、智とせず。力戰して人に勝つを善とせず。
何氏曰く、此は眾人の見る所聞く所を異（非凡）とすに足らずを言う。昔、烏獲は千鈞（一鈞8ｋｇ）の鼎を舉げて力となし、離朱は百步にして纖芥（細微）の物を覩て明となし、師曠は蚊行螘步（蚊が飛び蟻が歩く）を聽きて聰となす。兵が形を成し（形）を見（あら）わせば、誰ぞ能わざるや？（誰でも分かる）故に、勝が未だ形にならずして乃ち兵を知ることをなす。
張預曰く、人は皆能なり。此を引きて以て眾人の見、勝つに喻う。秋毫とは兔毛が秋に至りて勁細（堅く細い）を謂う。至輕を言う。

（古之所謂善戰者，勝於易勝者也。）
曹操曰く、微を原（たず）ね易く勝つ。其れ可勝を攻め、其れ不可勝を攻めず。
杜牧曰く、敵人の謀、初めに萌兆（予兆）有り。我は則ち潛運（深謀）して能くこれを攻む。力を用うに既に少く、勝を制すこと既に微（かすか）。故に曰く「易く勝つ」。
梅堯臣曰く、力が秋毫を舉げ、明が日月を見る、聰が雷霆を聞くならば、眾人の能とする所に出でず。故に、著に見れば則ち艱に勝つ。微に見れば則ち易に勝つ（形成が顕著になっての戦に勝つはけわしい。予兆を捉えて対処せば勝つは容易となる）。
何氏曰く、言うは、敵人の謀、初めに萌兆有り、我は則ち潛運して己に能くこれを攻む。力を用いること既に少く、敵を制すこと甚だ微。故に曰く、「易く勝つ」。
張預曰く、鋒を交え刃を接し、而して後に能く敵を制すは、是其れ勝つは難し。微を見て隱を察し、而して未だ形せざるに破るは、是其れ勝ち易し。故に善く戰うとは、常に其の勝ち易きを攻め、而るに其の勝ち難きを攻めず。

（故善戰者之勝也，無智名，無勇功。）
曹操曰く、敵兵の形未だ成らずしてこれに勝つは赫赫の功（素晴らしい功績という評価）無し。
李筌曰く、敵に勝つも天下知らずんば、何の智名（知謀の名声）有りや？
杜牧曰く、未萌に勝てば天下知らず、故に智名無し。曾ち刃に血ぬらず、敵國已に服す、故に勇功無し。
梅堯臣曰く、大智は彰（あきらか）ならず、大功は揚（あ）げられず、微を見れば勝つこと易し、何の勇何の智か？
何氏曰く、患を未だ形せずして銷（け）せば、人誰が智を稱す？戰わずして服せしめば、人誰が勇と言う？漢の子房、唐の裴度これを能くす。
張預曰く、陰謀潛（ひそか）に運（めぐ）らせ、形無くして勝を取る。天下、敵を料（はか）り勝を制す智を聞かず、搴旗（敵の旗を抜き取る）に斬將の功を見ざるは、留侯（張良、字、子房）未だ嘗て戰鬬の功有らざるが若き、是なり。

（故其戰勝不忒；）
李筌曰く、百戰して百勝す、何の疑貳（疑心異心）有りや？此れ筌（李筌）、「忒」字を以て「貳」とす。
陳皥曰く、籌（はかりごと）は虛（実体無く、うつろ）に運（めぐ）らざず、策は徒（いたずら）に發せず。
張預曰く、力戰して勝を求めば、善者と雖も亦敗れる時有り。既にして未形に見、未成に察せば、則ち百戰して百勝すこと、一差忒も（いささかも違うこと）無し。

（不忒者，其所措必勝，勝已敗者也。）
曹操曰く、敵の必ず敗れる可きを察せば、差忒（差錯、誤差）せず。
李筌曰く、勝を已に敗れる師に置けば、何ぞ忒（たが）う？師が老（つか）れ、卒が惰（おこた）り、法令一ならずば、「已に敗れる」と謂う。
杜牧曰く、措は猶置なり。忒は差忒なり。我能く勝を不忒者に置くとは何ぞ？蓋し、先ず敵人の已に敗れる形を見て、然る後に攻む。故に、能く必勝の功を致すこと、差忒せず。
賈林曰く、「措」を讀みて「錯」とす、錯雜（交錯混雜）なり。敵の勝を取るに、理非は一途、故に雜（敵を錯雜）して料（はか）る。未形に勝つを常とせば、已に敵の敗れるを見る。
梅堯臣曰く、其の敗れる可きを睹（みれば、勝つこと則ち差（たが）わず。
何氏曰く、善く料るなり。
張預曰く、能く勝ちて差わざる所以は、蓋し敵人に必ず敗れる可き形有るを察知し、然る後に兵を措きて勝つのみ。

（故善戰者，立於不敗之地，而不失敵之敗也。）
李筌曰く、兵は地を得ては昌（まさ）り、地を失いては亡ぶ。地は要害の地。秦軍が趙を敗る。先ず北山に據る者が勝つ。宋師が燕を伐つは、大峴を過ぎて勝つ。皆其の地を得てなり。
杜牧曰く、不敗の地とは、不可勝の計を為す。敵人をして必ず我を敗ること能わしめず。敵人の敗を失わずとは、敵人の可敗の形を窺伺（暗中觀察、監視）し、毫髮も失わざるを言う。
陳皥が註は李筌に同じ。
杜佑が註は杜牧に同じ。
梅堯臣曰く、善く敵の隙を候（看望）せば、我は則ち常に勝つ。
王晳曰く、常に不可勝を為し、敵の可勝を待ち、其の機を失わず。
何氏曰く、自ら備有るを恃みて則ち患無く、常に敵の隙を伺えば則ち勝ちを失わず。不敗之地に立つは利（よ）ろしとは、我は常に勝つ所を為すを言う。
張預曰く、吾が法令を審（つばひらか）にし、吾が賞罰を明らかにし、吾が器用に便（たよ）り、吾が武勇を養う。是、不敗の地に立つなり。我に節制有れば、則ち彼將に自ら衄（やぶ）れる。是、敵の敗を失わずなり。

（是故，勝兵先勝而後求戰，敗兵先戰而後求勝。）
曹操曰く、謀有りて慮無きなり。
李筌曰く、計と不計となり。是を以て薛公は黥布の必敗を知り、田豐は魏武（曹操）の必勝を知。是は其の義なり。
杜牧曰く、管子曰く、「天の時地の利。其の數多少、其の要必ず計數に出ず。故に凡そ攻伐の道、計必ず先に內に定まり、然る後に兵境を出ず。敵人の政明らかならずんば、（攻撃を）加うこと能わず。敵人の積（蓄積）明らかならずんば、約（約計）すること能わず、敵人の將明らかならずんば、軍（出軍）を先んじられず、敵人の士明らかならずんば、陳（布陣）を先んじられず。故に、眾を以て寡を擊ち、治を以て亂を擊ち、富を以て貧を擊ち、能を以て不能を擊ち、教士練卒を以て毆眾白徒（未統率未教練の士卒）を擊てば、故に、能く百戰して百勝す」。此れ則ち先ず勝ちて而る後に戰を求む義なり。衛公、李靖に曰く、「夫れ將の上務は、明察して眾和、謀深くして遠くを慮り、天時を審かにし、人理を稽えるに在り。若し其の能を料らず、權變に達せず、敵に臨機に對すに及びて、方始趑趄（まさに足がすくみ）、左顧右盼し、計を出す所無く、過說を信任し、一（ある）いは彼（あち）一いは此（こち）、進退に狐疑（優柔不断）し、部伍（統率されない部隊）が狼藉す。何ぞ蒼生（人民）を趣（うなが）し湯火に赴（むか）わせ、牛羊を驅りて狼虎に啗（くらわ）す者に異るや？」。此れ則ち先ず戰いて後に勝を求む義なり。
賈林曰く、彼我の情を知らず、兵を陳し輕く進む。意は勝を求むと雖も、而るに終に自ら敗れる。
梅堯臣曰く、可勝にして戰えば、戰いて則ち勝てり。未だ可勝見（あら）われずんば、勝得る可きや？
何氏曰く、凡そ用兵とは、先ず必勝の計を定め、而る後に軍を出す。先に謀らざるが若きは、唯強を恃と欲（おもう）のみで、勝未だ必ならず。
張預曰く、先ず勝を計謀し、然る後に師を興す。故に、以て戰いて則ち克つ。尉繚子曰く、「兵は必勝ならずんば、戰えと言う可からず。攻は必拔ならずんば、攻めよと言う可からず」。危き事は輕舉す可らずを謂う。又、曰く、「兵は先ず此（己）に勝ち、則ち彼（敵）に勝つを貴とす。此に勝たずば、則ち彼に勝たず」、此れ之の謂（いい）なり。趙充國が常に先ず計して後に戰うが若きは、亦是なり。謀らず進むは、幸にして其の成功を欲うのみ。故に戰えば則ち敗れる。

（善用兵者，修道而保法，故能為勝敗之政。）
曹操曰く、善く兵を用いるとは、先ず自ら修治し、不可勝の道を為し、法度を保ち、敵の敗亂を失（のが）さず。
李筌曰く、順を以て逆を討ち、無罪の國を伐たず。軍至れば、虜掠すること無く、樹木を伐り、井竈を污（けが）すことをせず、山川、城社、陵祠を過ぐるに、必ず滌して除き（汚したものを洗い除く）、亡國の事は習わず、之を道法と謂う。軍は嚴肅にして、死有れば犯無く、賞罰信義、將を立つこと此の若くせば、能く敵の敗政に勝つ。
杜牧曰く、道は仁義なり。法は法制なり。善く兵を用いるとは、先ず仁義を修治し、法制を保守し、自ら不可勝の政を為し、敵を伺いて可敗の隙有れば、則ち攻めて能くこれに勝つ。
賈林曰く、常に用兵の勝道を修め、賞罰の法度を保つ。此の如くせば則ち常に勝を為し、能わずんば則ち敗れる。故に曰く、「勝敗之政」なり。
梅堯臣曰く、攻守を自ら修め、法令を自ら保つは、我に在るのみ。
王晳曰く、法とは下の五事なり。
張預曰く、修治は戰の道を為し、保守は敵を制す法、故に能く必勝す。或に曰く、先ず道義を修飾し、以て其の眾を和す。後に法令を保守し、以て其の下に戢（おさ）む。民をして愛し畏れしむ。然して後に能く勝敗を為す。

（兵法：一曰度，）
賈林曰く、度は土地なり。
王晳曰く、丈尺なり。

（二曰量，）
賈林曰く、量は人力の多少、倉凜（穀物の倉）の虛實。
王晳曰く、斗斛なり。

（三曰數，）
賈林曰く、算數なり。數を以てこれを推（推量）す。則ち眾寡を知る可し、虛實を見る可し。
王晳曰く、百千なり。

（四曰稱，）
賈林曰く、既に眾寡を知れば、兼（あわ）せて、彼我の德業、輕重、才能の長短を知る。
王晳曰く、權衡なり（天秤にかけて比べる）。

（五曰勝。）
曹操曰く、勝敗の政、用兵の法、當に此の五事を以て稱量し、敵の情を知る。
張預曰く、此れ安營（宿営）、布陳の法を言う。李衛公曰く、「士に教えるは、猶盤に碁を布すがごとし。若し畫路（盤の縦横の区切）が無くば、碁安んぞこれを用いん？」。

（地生度，）
曹操曰く、地の形勢に因りてこれを度（はか）る。
李筌曰く、既に (敵)情有るを度れば、則ち敵を量（はか）りて禦（ふせ）ぐ。
杜牧曰く、度は計なり。我が國土の大小、人戶の多少、征賦の所入、兵車の所籍、山河の險易、道里の迂直を度るを言う。此事と敵人の如何を度りてより、然る後に兵を起す。夫れ小ならば大を謀ること能ず、弱ならば強を擊つこと能わず、近ならば遠を襲うこと能ず、夷（たいら）ならば險を攻むこと能ず。此れ皆地により生ず、故に先ず度る。
梅堯臣曰く、地に因りて以て軍勢を度る。
王晳曰く、地は人が履（ふ）む所。兵を舉げ攻め戰うは、先ず地を本とす。地に由り故に度を生ず。度は長短を度り、遠近を知る所以。凡そ行軍して敵に臨めば、先す須べからく遠近の計を知るべし。
何氏曰く、地は遠近、險易なり。度は計なり。未だ軍出でずして、先ず敵國の險易、道路の迂直、兵甲の孰多？勇怯の孰是？を計り、計度して伐つ可きならば、然る後に師を興し眾を動す。以て功成る可し。

（度生量，）
杜牧曰く、量とは酌量なり。言うは、地を度ること已に熟せば、然る後に能く彼我の強弱を酌量す。
梅堯臣曰く、地を度るに因り以て敵情を量る。
王晳曰く、大小有るを量るを謂う。言うは、既に遠近の計を知れば、則ち須べからく更に其の敵の大小を量ることなり。
何氏曰く、彼己の形勢を量酌す。

（量生數，）
曹操曰く、其の遠近、廣狹を知り、其の人數を知る。
李筌曰く、敵の遠近、強弱を量り、士卒軍資の數を備うべし而して勝つ。
杜牧曰く、數とは機數なり。言強弱已に定りて、然して後に能く用機變數（臨機応変）す。
賈林曰く、地の遠近、廣狹を量れば、則ち敵人の人數の多少を知る。
梅堯臣曰く、量に因りて以て眾寡の數を得る。
王晳曰く、數とは多少を紀す所以。既に敵の大小を知れば、則ち更に其の精劣、多少の數を計るを言う。曹公曰く、「其の人數を知る」。
何氏曰く、數とは機變（臨機応変）なり。先ず彼我の強弱、利害を酌量し、然して後に機（臨機応変）數（権謀術数）を為す。
張預曰く、地に遠近、廣狹の形有り、必ず先ずこれを度りて知る。然して後に其の容、人の多少の數を量る。

（數生稱，）
曹操曰く、稱は己と敵の孰れが愈るかを量る。
李筌曰く、數が分かり既に定まれば、賢智が多少は、賢を得れば重く、賢を失わば輕きこと、韓信が楚漢を論ずが如し。須べからく輕重を知り、賢愚を別けてこれを稱（比較）せば、錙銖（僅かでも）則ち強し。
杜牧曰く、稱は校なり。機權の數已に行われば、然して後に以て彼我の勝負を稱校（比較校訂）す可し。
梅堯臣曰く、數に因りて以て輕重を權す（秤る）。
王晳曰く、稱すは重輕を知る所以、強弱の形勢を喻る。能く盡く遠近の計、大小の舉、多少の數を知り、以て敵と相形す、則ち重輕の所在を知る。
何氏は杜牧が註に同じ。

（稱生勝。）
曹操曰く、稱はこれを量る、故に其の勝負の在る所を知る。
李筌曰く、稱は輕重を知る。勝敗の數を知る可し。
杜牧曰く、稱は校（かむが）えること既に熟し、我が勝と敵の敗の分明を見る。
梅堯臣曰く、輕重に因りて以て勝負を知る。
王晳曰く、重きは輕きに勝つ。
陳皥、杜佑は杜牧の上「五事」注と同じ。
何氏曰く、上の五事、未だ戰わずして先ず必勝の法を計る。故に、孫子、古法を引きて以て勝敗の要を疏（箇条書きに）す。
張預曰く、稱は宜なり。地形と人數とが相稱せば（よろしければ）則ち疏密に宜しきを得る、故に可勝なり。尉繚子曰く、「過無きは度數に在り」。度は尺寸を謂い、數は什（10人一組の兵）伍（5人一組の兵）を謂う。度は以て地を量り、數は以て兵を量り、地と兵とは相稱せば則ち勝つ。五者は皆て地形に因りて而して得る。故に、地により而してこれを生ず。李靖が「五陳」は、地形に隨いて是を變ず。

（故勝兵若以鎰稱銖，）
梅堯臣曰く、力あれば舉げ易し（重きは軽きを容易に持ち上げる）。

（敗兵若以銖稱鎰。）
曹操曰く、輕きは重きを舉げること能わず。
李筌曰く、二十兩を鎰と為す。銖の鎰に於けるは、輕重位を異にす（圧倒的に軽い）。勝敗の數は、亦、復すことかくの如し（重きが軽きに勝つ）。
梅堯臣曰く、力は制し難し。
王晳曰く、銖鎰を言うは、以て輕重が至を明らかにす。
張預曰く、二十兩を鎰と為し、二十四銖を兩と為す。此れ制有る兵が制無き兵に對すを言い、輕重侔（ひと）しからず。

（勝者之戰民也，若決積水於千仞之谿者，形也。）
曹操曰く、八尺を仞と曰く。決水千仞ならば、其の勢疾し。
李筌曰く、八尺を仞と曰く、其の勢を言う。杜預吳を伐つ。兵破竹の如きを言う。數節の後、皆刃を迎えて自ら解く。則ち其の義なり。
杜牧曰く、夫れ水を積むこと千仞の谿に在るを測量す可からずは、我が守り形見（あら）わさざるが如し。水を決して下に及べば、湍趕（急流追いて）奔り注ぐこと、我が攻の如く、禦ぐ可からず。
梅堯臣曰：水、千仞の谿を決せば、其の迅を測ること莫からん。兵、九天の上を動かば、其の跡見わること莫からん。此の軍の形なり。
王晳曰く、千仞の谿は至陗絕（高く深きこと隔絶）なり。喻えば、不可勝の可勝に對する形、機に乘じて攻むは、決水（決壊した水）、是なり。
張預曰く、水が性は高を避けて趨り下る。決の深谿に赴（ゆ）くは、固より湍（急流）の（土砂を）浚（さら）うは禦くこと莫からん。兵の形を水に象（かたど）れば、敵の不備に乘じ、敵の不意を掩（おそ）い、實を避けて虛を擊てば、亦、制すること莫からん。或に曰く、千仞の谿とは、不測の淵を謂う。人能く其の淺深を量ること莫からん。決して下るに及べば、則ち其の勢を能く禦くこと莫し。善く守る者、形を匿し跡を晦（くら）まし、九地の下に藏れるが如くせば、敵は能く其の強弱を測ること莫し。虛に乘じて出ずに及べば、則ち其（敵）の鋒、能く當ること莫し。

了　2018年5月3日　修正　2020年8月1日